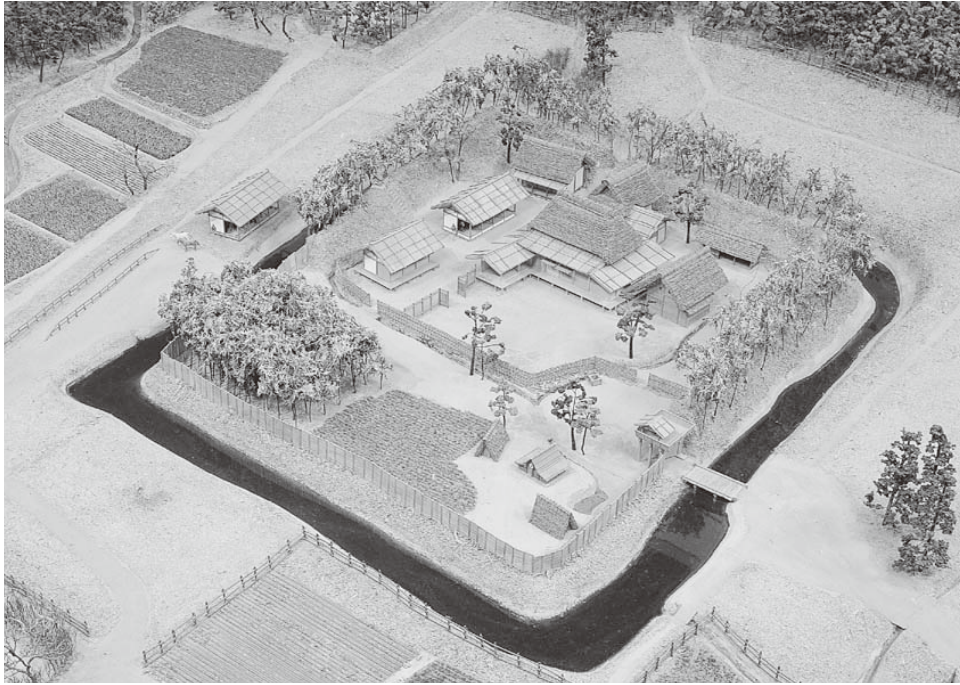


東国の混乱と武士のおこり

関東は、朝廷のあった京都から遠いため、国の支配が弱く国司や豪族の争いが続いて、政治は、乱れていました。この間、次第に現地の豪族が力を持つようになったため、朝廷は、役人をつかわして乱れをなくそうとしましたが、うまくいかず、政治はさらに乱れていました。現地の豪族たちは、さかんに土地の開墾をすすめ、大きな経済力をつけると同時に、自分の利益を守るため武力をたくわえました。彼らは、やがて天皇家の血筋を引く源氏や平氏、有力貴族の出である藤原氏などを中心に武士たちがまとまり、武士団がつくられました。



武士の館 写真提供 国立歴史民俗博物館

武士の館は、用水路を兼ねた堀と土壁に囲まれ、数ヶ所に櫓門を配する防衛的性格を有したものだ。

堀の内部には、主屋、対屋、厨、廐舎、炭小屋、倉等が建てられ、堀の外には矢場や牧を取り囲む柵が設けられていた。



東国武士団の館とその付近

高望王の下向と桓武平氏の関東土着

平安時代のはじめ桓武天皇のひ孫にあたる高望王は、上総介(千葉県の中部を治める役人)に任命されると都には戻らずそのままその地に土着し、次々に私有地を広げていきました。さらにその子の国香、良持(将)、良正、良文たちは関東を中心に各地を支配していきました。平安時代のおわり頃に朝廷の中で勢力を持った平清盛は国香の子孫です。また、良文の子孫には千葉氏や上総氏がいます。



高望王と妃
『紙本著色千葉妙見大縁起絵巻』より
栄福寺蔵 非公開

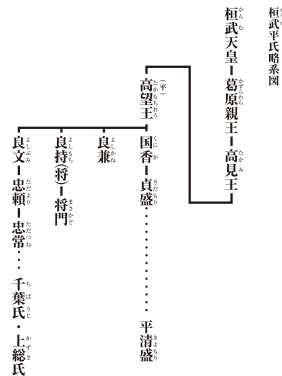


平良文 『紙本著色千葉妙見大縁起絵巻』より
栄福寺蔵 非公開

平良文は、高望王の子。相模の村岡(現神奈川県藤沢市)を本領とし、村岡余五郎と称した。将門の乱では、一定の功績があったものと考えられている。この乱の前後に下総国の相馬郡内に所領を獲得した。この所領は、以後良文の本流に継承された。



上総国分尼寺復元模型 市原市教育委員会
高望が赴任した上総国府は、国分寺、国分尼寺の近くにあったと推定される。



平将門の乱

平安時代なかばの関東は治安が悪く、豪族たちはたがいに争いをくりかえしていましたが、なかでも良将(持)の子将門は、土地をめぐる争いから常陸(今の茨城県)の豪族源護の子や叔父の国香を討ちました。また、常陸の国司と豪族との争いをきっかけにして常陸国府(国司が政治を行なう役所)を占領しました。続いて関東各地の国府を占領して自分の弟や仲間たちを国司に任命しました。朝廷は、これを反乱とみなし軍をつかわしましたが、その前に国香の子貞盛と藤原秀郷は将門を攻撃して乱をしずめました。こうした将門の動向は、関東地方の武士達が朝廷に対抗できる大きな力を持ちはじめたこととして重要な出来事でした。



国王神社

将門の本拠地のあった常陸国岩井郡内に建てられた神社。将門をまつこの神社は、天禄3年(972)将門の娘である如蔵尼が将門の魂を慰めるために建てたと伝えられている。



岩井の宮所跡 茨城県岩井市
将門の拠点となった所。



将門の乱関係図 坂本賞三『将門時代』による



将門を攻める藤原秀郷と平貞盛 「倭藤太絵巻」金戒光明寺蔵より
倭藤太は、藤原秀郷の別称。秀郷は、平貞盛とともに将門を討った。

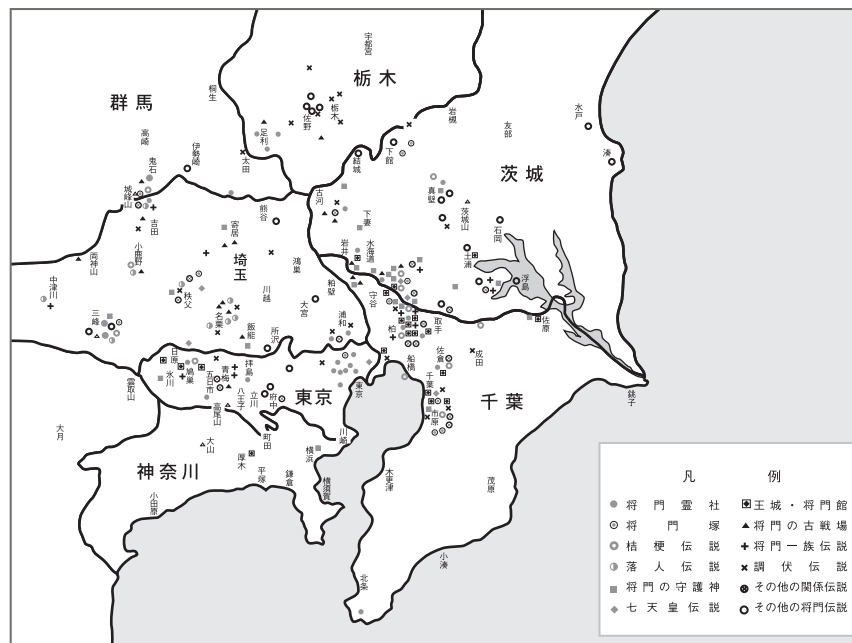
関東の将門伝説

将門の乱は、東国が朝廷の支配から抜け出そうとする大きな乱です。後に千葉氏など東国の人々は、鎌倉に源氏の幕府をつくることで将門が果たせなかった東国の自立をなすとげることになりました。将門は関東の多くの人々に支持されていたのですが、準備や見とおしが十分でなかったため失敗に終わり、悲劇的な最期をとげることになりました。

関東各地に残されている将門伝説には、その後の関東の人達の様々な思いがこめられています。

〈千葉市内の主な将門伝説〉

- ・七天王塚—左の写真参照
- ・黒砂伝説—稲毛区黒砂は、将門の落人が開墾し、黒い土の豊かな土地にしたという伝説。



関東の将門伝説分布図 『関東の将門伝説』新読書社より



七天王塚 千葉市中央区亥鼻

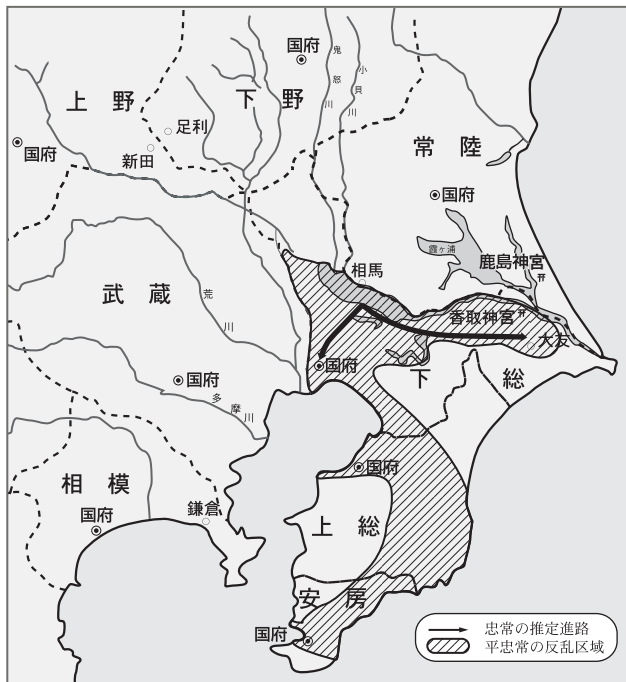
千葉大学医学部の内外に7基の塚が点在し、牛頭天王を祀る。将門の影武者7人の墓と伝えられる。



平将門坐像 国神社蔵

平忠常の乱

将門の乱の後、しばらくして房総全体を巻き込む大きな反乱がおこりました。この乱をおこしたのは、高望王の子孫であった平忠常です。忠常は、上総国府や安房国府を攻撃し、朝廷の命令に従いませんでした。朝廷は、次々と役人をつかわして反乱をしずめようしましたが、いずれも失敗しました。このため今度は、源頼信をつかわすと忠常は、頼信に降伏し、反乱はしずまりました。この頼信は、源頼朝の先祖にあたる人です。この反乱を通じて房総の土地は大いに荒れはてましたが忠常の子孫は罪を許され房総半島各地に土着し、千葉氏や上総氏として新たに領地の経営に努め、次第に大きな力をつけるようになります。



平忠常の乱経過図

◇ 忠常館 ◇

『千学集抜粹』では、忠常の本拠地を香取郡の大友としており、また、『今昔物語』に「内海に遙かに向かひに有る也。」とあり、内海を濠海とすると両者は符合する。



大友館跡航空写真



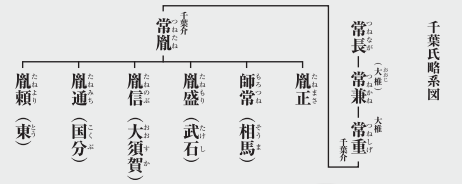
大友館跡 香取郡東庄町大友

東国の混乱と千葉氏の勃興

ちばのしよう せいつつ ちばし
千葉庄の成立と千葉氏のおこり

平忠常の子孫であった大椎常兼は、上総国大椎を本拠地として下総国一帯に勢力をふるいました。その子常重は、家督を継ぐと1126年(大治元年)拠点を上総国大椎から千葉に移し、新たな武士団をつくりました。このころ常重は、先祖代々の土地を院に寄進し、千葉庄を成立させ、現地での支配権を確かなものとしようとしました。

※ 院・・・中央の有力者である天皇家の一族。



千葉介常重
『下総国千葉郷妙見寺大縁起絵巻』より
歎喜寺蔵 非公開

常重は、両総平氏に属する大椎常兼の嫡子。常兼の没後、千葉に移住し、新たに武士団(千葉氏)を形成する。



大日寺の五輪塔 千葉市稲毛区轟町

千葉氏の菩提寺とされた大日寺には14世紀前半から15世紀前半頃に造られた16基の五輪塔がある。千葉氏一族の墓と伝えられる。

東国の混乱と千葉氏の勃興

相馬御厨をめぐる相論

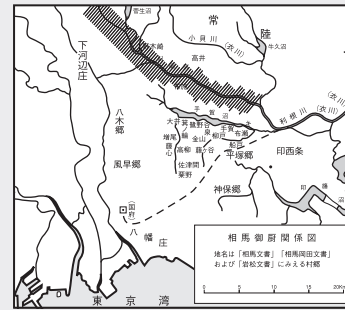
大椎常兼の子常重は、相馬にもっていた所領を伊勢神宮に寄進し、その支配権を得ましたが、国司は、税金の未払いを理由に、この支配権を横取りしました。また、武士の棟梁として知られた源義朝もこの土地を譲るように要求しました。常重の子常胤は、未納の税金を支払い、義朝とは主従となることで相馬御厨の支配権を取り戻しました。しかし、義朝が平治の乱で平清盛に敗れるとこの土地は国家のものとなり、支配権も常陸国の豪族である佐竹氏に取られてしまいました。

※ 御厨・・・伊勢神宮の荘園



伊勢神宮内宮

伊勢神宮内宮は、千葉氏の所領であった相馬御厨の領主。



相馬御厨関係図

『千葉常胤』福田豊彦著 吉川弘文館刊より

源頼朝の拳兵と千葉介常胤

平治の乱に敗れ、伊豆国(今の静岡県)の蛭ヶ小島に流されていた源頼朝(源義朝の子)は、1180年(治承4年)平家方の山木兼隆を討つことに成功しましたが、相模国(今の神奈川県)の石橋山の戦いに敗れて房総に逃れました。安房国(今の千葉県南部)の狛島(千葉県鋸南町)に着いた頼朝は、千葉介常胤と上総介広常に参加を命じました。

常胤は、ただちに頼朝に対して参上を知らせました。常胤がいち早く参加を決意した理由には、次のようなことが考えられます。

- ①常胤は、源頼朝の父義朝とは主従の関係があった。
- ②平治の乱以降、相馬御厨の支配権を平家方の佐竹氏に奪われるなど平家から強い圧迫があった。
- ③常胤の六男胤頼は、頼朝とは拳兵以前から関係があり、また、七男の日胤は頼朝の祈祷僧であった。



源 頼朝坐像 東京国立博物館蔵



千葉介常胤
『下総国千葉郷妙見寺大縁起絵巻』より 歡喜寺蔵 非公開



石橋山古戦場 小田原市

源頼朝と大庭景親が戦った古戦場。敗れた頼朝は、舟で安房に逃れた。(写真提供：小田原市)



蛭ヶ小島 静岡県伊豆の国市

源頼朝は、平治の乱の後、治承4年(1180)の拳兵までここに流されていた。(写真提供：伊豆の国市)



頼朝上陸の地 千葉県鋸南町

石橋山の戦いに敗れた頼朝は、安房国狛島(鋸南町龍島)に上陸した。

千葉六党



金剛授寺尊光院に参詣する頼朝と千葉家の人々 『下総国千葉郷妙見寺大縁起絵巻』 歿喜寺蔵 非公開



千葉介胤正 常胤の長男



千葉氏の本家の家督と上総・下総守護職を継承し、両介と呼ばれた。また、千葉領であった千葉庄(千葉市)を始め下総国内、上総国内、九州の小城郡、薩摩の寄郡・五個郡などの所領を譲られた。頼朝の近くに仕え、頼朝より深く信頼された。

大須賀胤信 常胤の四男



大須賀氏の祖。常胤より千葉庄田部田郷(若葉区多部田町)、香取郡大須賀保(千葉県成田市)を譲られた。また、奥州合戦の功績によって陸奥国岩城郡(福島県いわき市)に所領を与えられた。

相馬師常 常胤の次男・別称師胤



相馬氏の祖、常胤より下総の相馬御厨を譲られた。また、文治5年(1189)の奥州合戦の功績によって陸奥国行方郡に所領を与えられた。この一族は、後、奥州相馬氏と下総相馬氏に分かれる。

国分胤通 常胤の五男



国分氏の祖。常胤より下総国葛飾郡国分郷(市川市)を譲られた。また、香取郡本矢作(香取市)にも所領があった。

武石胤盛 常胤の三男・別称胤成



武石氏(苜理氏、蒲谷伊達氏)の祖、常胤より千葉庄武石郷(千葉市花見川区武石町地内)を譲られた。また、奥州合戦の功績によって陸奥国行方郡に所領を与えられた。鎌倉時代の末、陸奥国に移住。

東(木内)胤頼 常胤の六男



東氏・海上氏の祖。常胤より下総国木内庄、立花庄(後東庄に地名が変わる。香取市・東庄町など)や三崎庄(銚子市・旭市)などを譲られた。

頼朝への参上を決意した常胤は、胤頼(常胤の六男)と成胤(常胤の孫)に命じて下総国府の平家を討った後、1180年(治承4年)9月17日、この国府において頼朝と面会しました。また、上総介広常は、2日遅れて頼朝に参上しました。常胤や広常の協力を得た頼朝は、10月2日、太日川(今の江戸川)、墨田川を渡って武蔵国に入り、更に相模国の鎌倉に入りました。

頼朝の信頼を得た常胤は、源平合戦や奥州合戦の後、下総国・上総国をはじめ全国各地に広大な所領を得て、幕府の中でも有力な御家人に成長しました。

これらの領地は、その後6人の子が受けつぎました。これを千葉六党といい、惣領である千葉介を中心に強力に一族が団結しました。

- ※ 源平合戦・・・源氏と平家の戦い。
- ※ 奥州合戦・・・頼朝と東北地方を支配していた藤原氏との戦い。
- ※ 御家人・・・頼朝の家臣。

宝治合戦と上総千葉氏の滅亡

千葉氏は、千葉介常胤の代に上総国や下総国を中心に広大な領地を得て、鎌倉幕府の中でも有力な御家人に成長しました。この領地は常胤の子胤正にひきつがれ、さらに常胤の孫に引き継がれましたが、大部分は、成胤と常秀に伝わりました。このため千葉氏の領地は、上総千葉氏(常秀)と下総千葉氏(成胤)に大きく分けられました。上総千葉氏は、常秀の子秀胤の代に幕府の有力御家人であった三浦氏と親戚となり、評定衆に任命されるなど大きな勢力を振りましたが、北条氏と三浦氏との争いにまきこまれて滅び、上総国の領地は幕府に没しゅうされました。この事件で千葉氏の全体の領地は大きく減少しました。

※ 北条氏・鎌倉幕府の執権。

※ 評定衆・鎌倉幕府の最高機関。



大柳館 睦沢町

上総権介秀胤の館。宝治合戦の際、三浦氏と姻戚関係のあった秀胤は、幕府より追討を受けた。



法華堂(御影堂)跡

頼朝の御影堂。安達氏の攻撃を受けた三浦介泰村以下の三浦一族は、頼朝の持仏堂(法華堂)に入り自刃した。



北条時頼像 建長寺蔵

北条時政の子義時の曾孫。幕府執権。有力御家人三浦泰村と対立し、宝治元年(1247)、三浦氏や上総千葉氏を滅亡させる



安達泰盛 『蒙古襲来絵詞』より

泰盛は、宝治合戦の最大の功労者。北条時頼の命で三浦泰村を攻撃する。

鎮西(九州)千葉氏

千葉氏は、鎮西(九州)の北部(今の佐賀県)に領地を持っていました。そのため元寇の時には、幕府の命令により千葉介頼胤と宗胤の親子が元(モンゴル)と戦うために九州に出かけました。しかし、頼胤は元との戦いで得た傷がもとで九州で没し、宗胤は、元が三度目に攻めてくる可能性があったため九州から離れることができませんでした。そこで、千葉氏の本家は胤宗が継ぐことになり、ここで千葉氏は九州千葉氏と下総千葉氏に大きく分かれることになりました。



千田胤貞の墓 佐賀県小城市光勝寺境内



千葉宗胤

『下総国千葉郷妙見寺大縁起絵巻』より
 歎喜寺蔵 非公開

千葉介頼胤の子。二度目の蒙古襲来である弘安の役(1281)で九州に出陣。九州千葉氏の祖。異国警護番役として活躍。